別紙様式１

平成２９年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	■共同研究推進　□若手教員研究支援　□個人研究支援 □研究推進重点設備　□研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	幼児の「見方・考え方」を培う遊戯材の開発の研究 －「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具現化をめざして－
報告者氏名・所属・職名	小林恵理子・・附属函館幼稚園　教諭 橋本　忠和・・附属函館幼稚園園長（北海道教育大学函館校教授）
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	小林恵理子・・附属函館幼稚園・教諭 橋本　忠和・・附属函館幼稚園長・北海道教育大学函館校教授 齊藤　　縁・・附属函館幼稚園副園長・教諭 藤谷　貴代・・附属函館幼稚園・教諭 伊藤公美子・・附属函館幼稚園・教諭

研究内容及び成果の概要

研究内容

（概要）

平成30年度全面実施の新幼稚園指導要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具現化を図るため、幼児の「見方・考え方」について園生活全体を通して、発達段階に応じて培うことを求めている。そこで、本研究では幼児の自発的な活動としての「遊びプロセス：創出の遊び・没頭する遊び・振り返りの遊び）で軸となる遊戯材を「見方・考え方」を構成する要素（気づき・創意工夫・思い巡らす）と関連付けて構想すると共に、3歳から5歳の各発達段階に応じて構想した遊戯材を活用した題材開発を行う。あわせて、そのパフォーマンスを読み取り園児を支援し、自らの授業を改善する評価手法を探求する。そうすることで、教員・学生の表現領域に関わる指導機能強化に取り組んだ。

（成果）

１．幼児の「見方・考え方」を培う遊戯材の開発の実践事例を推進するための理論的構築を図った。

次期幼稚園指導要領では、幼児期の以下の特徴を背景に幼児の「見方・考え方」について園生活全体を通して、一人一人の違いを受け止めて培うことを求めている。そして、以下のようにその定義を示している。

「幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることである」（幼児教育部会における審議の取りまとめp. 2）

この「見方・考え方」を園児の遊びの様相や発達段階を視点に整理すると次のようになる。「（　　）内は簡略したキーワード」

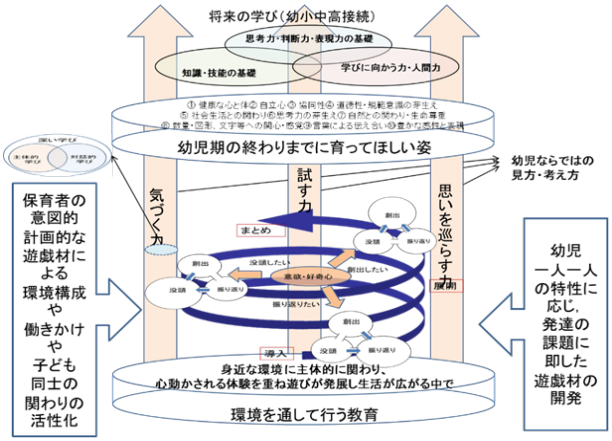

図1　本研究の構造図

・環境との関わり方や意味に気付づく。（気づく）

・気づきを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤する。（試す）

・気づきを取り込もうとして、思い巡らしたりする。（思いを巡らす：考える）

一方、審議のまとめでは見方・考え方を育む「アクティブ・ラーニング（主体的で対話的な深い学び）」の下記のような学びの過程を示している。（図1）「遊具・素材・用具や場の選択等から遊びが創出され、やがて楽しさや面白さの追求、試行錯誤等を行う中で、遊びへ没頭し、遊びが終わる段階でそれまでの遊びを振り返るといった過程」（幼児教育部会における審議の取りまとめp. 6）

本研究では、幼児教育において幼児ならでは「見方・考え方」を遊びを通して育むために、この学びの過程＝遊びのプロセスをベースにした教員による意図的、計画的な環境の構成＝カリキュラム・マネジメントの中で有効的に活用できる遊戯材の開発を目指した。そして、その研究において育成をめざす子どもの姿については、審議のまとめでの学びの過程を通してめざす「資質・能力」にリンクさせる。すなわち、幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱＝「知識・技能の基礎」・「思考力・判断力・表現力等の基礎」・「学びに

向かう力・人間性等」を踏まえつつ「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」を手掛かりに、明らかにしたものが、以下の 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にする。
① 健康な心と体② 自立心 ③ 協同性④ 道徳性・規範意識の芽生え⑤ 社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦ 自然との関わり・生命尊重 ⑧ 数量・図形、文字等への関心・感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現 （幼児教育部会における審議の取りまとめpp. 4-5）
さらに、この10の姿は小学校以降の各教科の教育イメージと連動している。したがって、この姿を意識し指導することが、今までの幼小接続の研究の継続・発展させることに繋がると捉えた。（図1）

２．遊びのプロセスの中に幼児の「見方・考え方」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を位置づけた授業指導案の開発をおこなった。

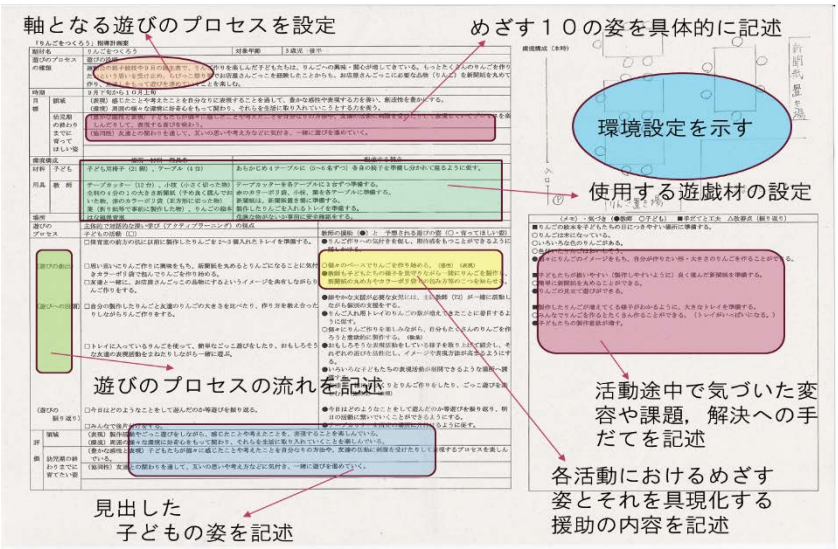

図2　本研究で開発した指導案

保育者の意図的計画的な遊戯材による環境構成や働きかけ、子ども同士の関わりを活性化させたり、幼児一人一人の特性に応じた発達の課題に即した遊戯材の開発を行ったりするために、幼児の「見方・考え方」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を位置づけた「遊びのプロセス」で構成される授業が展開できるように、図2のような遊びプロセス（創造・没頭・振り返り：考える）を効果的に配置した指導案の形式を開発した。

３．実践の指導案を作成し遊戯材の開発をおこなった。

図3　3歳児「りんごの木」
生活体験から広がった紙を使ったごっこ遊びから生まれた遊戯材）

図4　4歳児「手作り小麦粉」
魔法の粉＝小麦粉を水でこねて生まれた遊戯材

図5　5歳児　タブレットパソコンクイズ
季節の素材とタブレットパソコンを使った妖精の物を探すデジタル遊戯材

４．開発実践事例の公開と検討

10月6日に平成29年度の附属函館幼稚園研究大会を、講師に無藤隆先生を招いて開催しました。
教育大の協力者の先生方の指導・助言を受けて開発した遊戯材や遊びのプロセスを活用した授業を公開した。
図6／7　研究会の様子

５．先進研究校等の視察
・12月にお茶の水大学附属幼稚園・こども園（幼児の発達と保育内容について等）と東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎（幼小中の連携の在り方や保育内容・異年齢の交流）について視察
・1月に神戸大学附属幼稚園（子どもにとっての遊びの意味を問い直す）と吹田くすのき保育園（三育「食育・茶育・木育」からはじまる幼児教育）を視察
・1月に京都で開催の第33回日本実戦美術教育学会に参加し、各地の幼稚園・保育園の実践を聞くと共に、本園の実践を交流会で発表する。

６．本研究関連内容論文の執筆・公開　（北海道教育大学教育科学編第68巻・2号、誌面等で）
・学生の指導機能強化に関わる論文
「教員をめざす学生のエンパワーメントを高める幼稚園と大学が連携した学校インターンシップについての一考察　－北海道教育大学附属函館幼稚園“預かり保育”での表現活動を事例に－」
・幼児教育におけるアクティブラーニングやアプローチカリキュラムに関する論文
「アプローチカリキュラムにおける造形活動の題材開発の方向性に関する一考察　－北海道道南地区幼児教育教員へのアンケート及び先行事例の分析を通して－」

成果の公表の状況

【著書】橋本忠和著『元気を創る造形教育の理論と実践（幼児造形・図画工作編）』トール出版、2018年
【学術論文】
・橋本忠和、教員をめざす学生のエンパワーメントを高める幼稚園と大学が連携した学校インターンシップについての一考察　－北海道教育大学附属函館幼稚園“預かり保育”での表現活動を事例に－、北海道教育大学教育科学編第68巻・2号、2018年、511－526
・藤谷貴代・橋本忠和、アプローチカリキュラムにおける造形活動の題材開発の方向性に関する一考察　－北海道道南地区幼児教育教員へのアンケート及び先行事例の分析を通して－、北海道教育大学紀要教育科学編第68巻・2号、2018年、537－546

教育現場で活用可能な分野・教材等

・幼児の「見方・考え方」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や遊びのプロセスを位置づけた授業指導案及び開発した遊戯材の事例紹介（平成２９年度　北海道教育大学附属函館幼稚園教育研究紀要に掲載）

配布又はダウンロード可能な資料	・研究テーマに関する開発実践事例等の紹介：北海道附属函館幼稚園ホームページ http://www.hokkyodai.ac.jp/fuzoku_hak_kind/index.html ・北海道教育大学教育科学編第68巻・2号掲載の研究紀要 「教員をめざす学生のエンパワーメントを高める幼稚園と大学が連携した学校インターンシップについての一考察＝http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9689」 「アプローチカリキュラムにおける造形活動の題材開発の方向性に関する一考察＝http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/967」3
問合わせ先	代表者：小林恵理子及び橋本忠和（附属園長） 電　話：附属幼稚園　0138-46-2237　　橋本研究室　0138-44-4319 FAX　：附属幼稚園　0138-47-8731 mail　：hak-fuyou@h.hokkyodai.ac.jp　及び　hashimoto.tadakazu@h.hokkyodai.ac.jp